

2019年9月14日にマトリョミン合奏でギネス世界記録を更新

趣味を通じた生きがいをづくり

十人十色

Vol.16

マトリョミン

マトリョミン



高濱 望 さん

【たかはま・のぞみ】1984年、広島県出身。2016年、高知県四万十市へ地域おこし協力隊として移住。移住女子シェア&ゲストハウス「オキオカ」とリンパケアサロンを運営しつつ、「NPO法人四万十市への移住を支援する会」の移住アドバイザースタッフ、有機農業のアルバイトなど複業をしながら、田舎暮らしを楽しんでいる。

人とつながるツールの1つ

——高濱さんが演奏されるマトリョミンとはどんな楽器ですか。

手を触れずに演奏をする電子楽器です。ロシアのレフ・テルミン博士が開発した世界初の電子楽器"テルミン"の機能とロシアの民芸品マトリョーシカを合体させた楽器で、テルミン奏者の竹内正実先生が2003年に開発されました。

——高濱さんがマトリョミンを始められた動機は？

何かちょっと人と違う楽器をやってみたいなと思った時にインターネットでたどり着いたのがマトリョミンでした。人と違うことをやりたい性分なので、一番は、これをやれば目立てる(笑)という部分だったと思います。また、当時暮らしていた広島で、マトリョミンをされている方のコミュニティがあり、楽しそうに活動されていたことも大きかったです。

——演奏法は、どのようにして習得されたのですか。

最初はコミュニティに参加して教わりましたが、その後メンバーが始めたマトリョミン教室で生徒第1号になり、1年くらい通って演奏できるようになりました。「広島マトリョミンアンサンブルgururu」のメンバーとして、イベントなどで演奏させていただき、人前で弾く度胸もつきました。

——演奏で難しいのは、どんなところですか。

音の大きさを変えることができない楽器なので、何も考えずに音だけ追いかけて弾くと単調な演奏になってしまうところです。指の動きだけで演奏に表情をつけていくことは難しいですが、とても面白く奥深い部分でもあると思います。

——マトリョミンに関連し、どんな活動をされていますか。

地域おこし協力隊として高知県四万十市に移住したのですが、移住先でマトリョミンを演奏している仲間が見つからなかったため、自分がまず発信する側になって、地域のイベントで演奏したり、HPを作って、仲間を集めることから始めました。教える人もいなかったため、自分が先生となり、教室を始めました。現在2名の生徒さんに教えています。

——演奏をする際、どんなことに気を遣われるのですか。

マトリョミンは演奏スタイルの珍しさから目を引くことが多いのですが、ちゃんと楽器なので、耳に聴かせられるような演奏を届けることを意識しています。また、曲の合間に楽器

の特徴や魅力をお話したり、実際に体験してもらう時間をとって、多くの方にマトリョミンの楽しさをお伝えしています。

——マトリョミンの魅力は何ですか。

複数人で演奏した時のハーモニーの美しさ、一体感です。1人だと単音しか出せないのですが、複数人いけばパートごとに分かれてハモることができます。みんなで弾くことでより楽しくなりますし、自分の内側にも響く音となって返ってきます。

移住先では最初、マトリョミンを知っている人が誰一人いなかったのですが、だからこそ私は"マトリョミンの人"として覚えてもらえました。時々マトリョミンを知っている方に出会うとすぐテンションが上がります。そういう方とは他の価値観も似ている部分が多いのですぐに友人になれます。社会人になると新しい友人をつくることは難しいですが、マトリョミンというニッチな趣味でつながれる仲間の中には面白い価値観を持っている方も多く、多様な経験を積んでいる人生の先輩など世代を超えたつながりが、自分の世界を広げてくれます。

——高濱さんにとって、マトリョミンはどのような存在ですか。

人とつながるツールの1つです。聴いてくれる人に演奏でエンターテインメントを提供したり、共通の価値観をもつ人を探す時のフックになったり、弾きたいという人に演奏方法を教えることで価値提供できたりする、私の持つ大切なスキルの1つであり、楽しみです。

——今後やりたいことがあれば教えてください。

私の家からは日本最後の清流といわれる四万十川が見えるのですが、そこにかかる沈下橋ちんかばしの上に奏者みんなですらっと並んで、マトリョミンを弾きたいです。自然の中で弾くのはとても気持ちがいいんです。私は時々1人で川辺で弾きますけど、いろんな人にその気持ち良さを体験してほしいですし、きっと近所に住む地元の人たちも面白がって聴きにきてくれると思います。



生徒2人と一緒にギネス挑戦に参加